

沿岸性重要貝類の資源造成技術開発(メガイアワビ)

(増養殖試験研究事業)

柳 昌之

1. 研究の目的

既知のアワビ類の放流技術は主にクロアワビを対象として開発されたものであることから、メガイアワビにおいて大量放流に対応したより簡便で効果的な放流技術を開発するために、放流直後の減耗要因の検討を行う。

2. 研究方法

調査は島根県松江市鹿島町倉内湾の水深3～5mに設置した次表に示す4種類のかごを用いおのおのに6区、合計24試験区を設定した。

全区に30個の30mmサイズのメガイアワビを収容し、A区は1日、B区は3日、C区は6日、D区は7日、E区は13日、F区は30日後に潜水により全数取り上げた。

番号	試験区						寸法
	覆い網の形状						
1	側面網+上面網・底面網なし						70(L)×70(B)×30(D)cm 10mmの丸鋼製 覆網の目合い120節 (一部10mmの無結節網)
2	側面網+上面網あり・底面網なし						
3	側面網+上面網なし・底面網あり						
4	側面網+上面網・底面網あり						

3. 研究結果

試験区別の生貝発見率

	A (1日後)	B (3日後)	C (6日後)	D (7日後)	E (13日後)	F (30日後)
1	40%	27%	43%	27%	50%	30%
2	23%	10%	40%	37%	60%	23%
3	87%	87%	97%	100%	97%	53%
4	97%	100%	100%	20%	73%	77%

上面の網はベラ類等遊泳性の生物による食害を防ぐために設置し、底面の網はヒトデ類等匍匐性の生物による食害を防ぐために設置したものであるが、底面なしの1・2の試験区では予備実験の結果とは異なり上面網の効果は明瞭でなく、1-E・2-E区(13日後)で最高の50・60%の発見数となった、これはかごを設置した場所の底質の複雑性が異なっていたことに起因する可能性が大きい。

底面ありの3・4の試験区ではタコの侵入があった4-D区(7日後)を除くと上面網の有効性が伺えた。

今後は、底質の複雑性の要因を排するためかごの設置方法や人工的な付着基質の使用を検討し、初期減耗の要因をより明らかにするとともに、より簡易な放流器の開発を行う。